

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

# NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信



Vol.21  
2007  
WINTER



第7回永井隆平和記念・長崎賞授賞式

- |             |       |                            |
|-------------|-------|----------------------------|
| Report      | ..... | 第7回永井隆平和記念・長崎賞授賞式          |
| Report      | ..... | カザフスタン訪問記 ～核汚染の大地に足を踏み入れて～ |
| Report      | ..... | 韓国被爆者支援業務担当者への研修           |
| Information | ..... | 永井隆生誕100年記念式典のお知らせ         |
| Information | ..... | 出前出張講座のご紹介                 |

## 第7回 永井隆平和記念・長崎賞 アナトリー・ツイーブ博士に授与

NASHIM 事業の一環として1995年に創設されて以来、第7回目となる永井隆平和記念・長崎賞授賞式が10月31日に長崎市において開催され、はるばるロシアからご出席された受賞者アナトリー・ツイーブ博士に井石会長から賞状と賞牌（ブロンズ像「生命のともしび」）、副賞の賞金が授与されました。

来年2月は永井隆博士の生誕100年を迎える記念の年となるため、永井隆平和記念・長崎賞委員会及び選考委員会では、本賞にふさわしい方の選考のため、これまでに増して活発な議論が重ねられました。アナトリー・ツイーブ博士は、1986年のチェルノブイリ事故直後から被災者の救助支援活動において指導的役割を果たし、被災者の健康診断データベース構築や長期追跡調査の遂行などによるチェルノブイリ被災者医療の向上と放射線科学研究の推進、さらには若手研究者の育成などの多岐にわたる貢献が評価され、今回の受賞となりました。

永井隆平和記念・長崎賞は原子爆弾による被爆者と放射線被曝事故による被災者に対する治療及び調査・研究等の分野において、ヒバクシャ医療の向上・発展、ヒバクシャの福祉の向上を通じ、世界平和に貢献し、将来にわたる活躍が期待される国内外の個人や団体に隔年毎に贈られます。



授賞式へは、長崎県副知事、長崎市長をはじめ、病院、研究施設などから多数の関係者の皆さんにご出席いただきました。また、ツイーブ博士が、「LIFE AND RADIATION」というタイトルでスピーチを行い、「チェルノブイリ事故後の日本政府や支援団体、研究者の皆さんのこれまでの協力を感謝し、今後も事故後に増加した甲状腺がんの治療に力を注ぎたい」と力強く述べられました。

授賞式後は祝賀会を開き、ツイーブ博士の受賞を皆さんに祝っていただきました。



長崎原爆病院進藤院長の音頭で乾杯。



長崎如己の会久松副理事長(右)と永井隆記念館の本田さん(左)



放射線影響研究所寺本常務理事(中央) 長崎大学原研朝長教授(右)、山下教授(左)

## 受賞者紹介



アナトリー ツィーブ  
Anatoly Tsyb 博士 (73歳)

ロシア医学アカデミー・オブニンスク放射線医学研究所所長

## 経歴

1934年1月21日生まれ

1957年 ウージュゴロド国立大学(ウクライナ)卒業

1959年～1961年 ウージュゴロド国立大学医学部大学院在学

1961年～1978年 ソビエト連邦陸軍医療部門医学放射線研究機関(RIMR)で大学院生として学んだ後、研究員、部門長として勤務。

1978年～1992年 ソビエト連邦陸軍医療部門医学放射線研究機関(RIMR)理事

1992年～現在 ロシア医学アカデミー・オブニンスク医学放射線研究所(MRRC RAMS=元RIMR)所長

## 活動歴

- 1986年 チェルノブイリ原発事故により放射線被曝した人々のためのロシア国立線量測定登録事務所(RNMDR)を設立。
- 1986年～現在 放射線事故の健康上の影響を緩和する連邦プログラムを実施。
- 1989年 「セミパラチンスク核実験施設の周辺の生態系の状況、付近に居住する住民の健康上の影響に関する国際会議」に参加。
- 1993年 当時の中曽根元総理大臣に招聘され、「脱冷戦における核実験禁止とプルトニウム問題についての協力」国際会議において基調講演を行った。
- 1996年 ウィーンで開催された「チェルノブイリから10年」国際会議に参加し、WHOを代表して発表を行った。

## 第7回永井隆平和記念・長崎賞を受賞して

この機会をお借りし、私の仕事を高く評価していただきましたことに、また、永井隆平和記念・長崎賞の栄誉を与えていただきましたことに、心から感謝の意を表す次第です。原爆の恐ろしい経験にもかかわらず、自分の苦痛を克服し、他人の苦痛を和らげることに全力を尽くした永井博士をはじめ、永井博士の同僚の皆様、心から敬意を表します。

広島・長崎原爆とチェルノブイリ事故は、世界に多大な苦痛をもたらし、放射線が及ぼす被害には境界がないことを実証してきました。一国に核の惨事があれば、国際的な影響をもたらします。このことから世界中の医師と科学者達は、チェルノブイリの放射線被害を理解し、それを緩和するため、力を合わせてきました。

チェルノブイリ事故直後の非常に困難な時期に、ご尽力いただいた日本政府と国民に心から感謝の意を表する次第です。

私たちと私たちの子供や孫たちは、ロシアと日本が経験した悲劇がまた繰り返されないように全力を尽くさなければなりません。「長崎の鐘」に永井博士が訴えた世界平和を共につくり出すことができると信じています。

※授賞式にあたっていただいたコメントの一部を掲載しています。





# カザフスタン訪問記

核汚染の大地に足を踏み入れて

長崎大学医学部長 河野 茂

今回、長崎ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)の代表としてカザフスタン共和国を9月3日から一週間訪問しました。現地では、永井隆博士の業績を中心としたNASHIMの活動や長崎大学医学部150周年の歩みを講演し、各種交流を深めることができました。実は私は1980年米国ニューメキシコ州立大学に留学している時に、長崎に落とされた原爆が開発されたロスアラモス研究所と核実験が実施されたアラモゴードを訪れています。しかし、今回は図らずも長崎に落とされた原爆の情報がソ連のスパイの手に渡り、長崎型の原爆が作成され、旧ソビエト連邦が第一回核実験をおこなった核実験場:ポリゴンを訪れることとなりました。

そこでの強烈な印象をお話する前に、まずNASHIMの関係の皆様にご報告したいことがあります。それは山下俊一教授の長い期間に渡る粘り強い努力がなければ、これまで、これほどの実績が挙がらなかったことを私が確信したことです。この国は旧ソビエト連邦から1991年に独立したばかりで、いわゆる旧共産圏に属するため、官僚機構やKGBの組織などの影響で、NASHIMの仕事を進めるためには粘り強い精神力と強靱な意志が必要な所と感じました。山下俊一教授や高村昇准教授の仕事ぶりをみますと、現地の人としっかりとした人間関係が確立されており、現場の人だけでなくいわゆる有力者との関係も確実に築きながら、人材を捜し、留学生や客員教授を受け入れ、時には忌憚のない議論をしながらも、辛抱強く現地に滞在して10年以上かけて積み上げてきた仕事ぶりには心から敬服するものがあります。



図1 カザフスタン共和国とセミパラチンスク

さて、2007年9月3日に私は山下教授、高村准教授、カザフスタン留学生のアイヌール・アキルジャンバさんと一緒に韓国経由でカザフスタンに入りました。長崎を朝7時に発ち、韓国経由で、カザフスタンのアルマティに現地時間の20時半(時差3時間)に到着しました。まず皆さんも私と同じように、カザフスタンってどこに在るのだろうと思われるとおもいます。(図1)で示しますように、モンゴルよりさらに西でチベットの北、シベリアの南に位置するところで、世界でも9番目に国土の広い所だそうです。いわゆるシルクロードの要で、中央アジアの中心といった国です。ここはウランウムやチタンなどの金属の埋蔵量が極めて多い所で、去年は小泉前首相も訪れ、国を挙げての外交が展開されましたが、政治的に経験豊かなナザルバイエフ大統領に翻弄され十分な成果を上げきれなかった印象が残っています。

アルマティのカザフ医科大では、関根一郎教授の教室に12年間留学して最近医学部長に就任したガビット・アリポフ先生の取り計らいにより医学部の4年生に対し150周年に関連した長崎大学医学部の歴史と被爆後の永井隆博士の献身的貢献と多くの先輩の努力で蘇った我が医学部歴史の話をさせて貰いました。その後いよいよ原爆実験の行われたセミパラチンスクに向かいました。さすがに実験が行われるような僻地であり、アルマティからの飛行機には決まった座席はなく、早いもの順に席をとるようなシステムで、窓側の座席は上空で

かなり冷え込むため通路側をわれ先に確保するよう山下教授から指導を受けました。しかもこのセメイ航空はIATAにも加盟していない航空会社であり、山下教授からは墜落しても保険はでないのとしっかり脅されながらの飛行でした。ここでは一足先に現地に入っていた現在関根一郎教授の教室に8年間留学しているセリック・メイリマノフ先生がすべての会合や仕事の調整をしてくれており、国際協力において彼のような人材の発掘と育成がいかに重要であるか実感しました。セミパラチンスク医科大学のマラット・ウラザリン副医学部長の紹介でトレベイ・ラヒンベコフ新学長を表敬訪問し、医学部2年生160人ほどが集まった教室で第7回長崎国際医学生奨励賞の授与式を行いました(図2)。白い帽子と白衣をつけた学生達の前で、3年生のディララ・アスハバリナさんと5年生のガオラル・ジュマグロワさんをそれぞれ表彰しました。感動的だったのは彼らの両親が授賞式に来られていたことと日本ではともすれば忘れ去られがちな規律と礼儀正しさでした。最後に私が長崎大学150周年の歴史を永井隆博士の話を中心に講演をしました。



図2 セミパラチンスク医科大学で行われた第7回長崎国際医学生奨励賞の授与式

そしてついに今回の最大目標である核汚染大地ポリゴンを訪れました。1949年8月29日に旧ソビエト連邦で初めて核実験が実施された場所

はセミパラチンスクから150kmほど西にあります。途中の道路は舗装されているものの穴ぼこだらけでゴトゴト大きく揺られながら、3時間ほどでまずクルチャトフ市に着きました。ここは核実験のためにつくられた秘密都市で、昔は地図にも載っていなかったそうです。その博物館(図3)で大まかな話を聞き、さらに60km



図3-1 クルチャトフの博物館において説明を受ける河野医学部長ら



図3-2 博物館内に展示されている核実験場の模型

ほど離れたポリゴンに向かいました。ここから案内の兵士が乗り込み、舗装されていない道路を土煙を上げながら走行し、1時間ほどかかって、ポリゴンの中心地点に着きました。途中、爆心地から14kmの地点では爆発のスイッチが押され、実験を観察した建物が残っていました。地平線と草原と空がどこまでも広がるこの大草原を進むと本当に核に汚染されているのだろうかと思うほど<sup>のどか</sup>長閑な大地です。ただ、中心地点に近づくにつれ、一定の距離をおいて、観察機器をおいた建物や被爆の影響を見るための建物が残骸として残っており、爆心地に近いものはほとんど倒壊し、次第に不気味な雰囲気醸し出していました。そして道なき道を少し外れたところに意外にも直径50mほどの大きな穴が空いており、その周囲の地上にはなんとなく不気味な小さな



図4-1 核実験における放射線量の測定



図4-2 核実験によって放射能汚染された石

穴の開いた黒い石が散らばっていました(図4)。ガイガーカウンターを近づけると草原のまっただ中で甲高いピーという不気味な連続音が鳴り響き、今でも40マイクロシーベルト/時間の残留放射線を出し続けているのが実感させられました。この音がなければ放射線が出ていることは解らないほど穏やかな草原の中で、野生動物はもちろんのこと、植物も生息し続けています。本当に一見普通の大草原に見えるこの場所は今でも永続的に生物に障害を与え続ける恐ろしい場所になってしまっています。この場所では1949年から52年まで核実験が行われたそうで、セミパラチンスクのポリゴン全体では1949年夏から1962年暮れまでの13年間で地上実験30回、空中実験88回が行われたそうです。だって広い草原の真ん中で今後数百年も続く放射能汚染を残す愚かな人類の行いは、そこに健気に咲いている小さなヒナゲシの可憐さと相まって、地球の環境と人間との関係を真剣に考えさせる重い気持ちにさせられました。しかも周辺の住民を巻き込んだ人体実験の様相も感じられる実験場は、米ソ両大国の核開発競争とはいえ、科学者の倫理観と人間のあり方についても強い示唆を与えています。爆心地を500mほど離れると突然放射線量は一般のバックグラウンドレベル0.04マイクロシーベルトに低下し、その後は荒涼とした草原を後にセミパラチンスクに向かって走りました。途中のチャガン村で長野県から一緒にみえた神谷さだ子さんが二人の老人から直接実験当時の話を聞いていました。二人とも子供の頃、赤黒いキノコ雲を見たそうで、初めての核実験の時には、前もって軍隊が来て核実験のあることを知らせ、家の外に出るように言われたそうです。逆なら理解できるのですが、当時のソビエト連邦は健康被害を隠して人体実験でもしていたような印象を受けました。爆心地から100kmほどの所なので、風向きによっては明らかに被ばくしているものと考えられます。荒涼とした夕暮れの草原を走る車中で、私が今後できることは何があるのか考え続けました。山下教授のように原爆関係の国際的な仕事はできないとしても、何か自分にできることがあるのではないかと考えながら、とっぴり日が暮れたセミパラチンスクに帰り着きました。

このように重い経験のあとのカザフスタン人の心のこもったもてなしは本当にアジア人共通の心に触れた思いがしました。マラット・ウラザリン教授の家は、部屋の中はやや肌寒く、しかもその日は奥さんが出張中で、彼が一人で夕食の料理を用意してくれました。なすび料理、サラミ、チーズ、鶏肉料理、スープとどちらかといえば質素な料理ですが、大変美味しく、彼の心からの歓待をウオッカでの乾杯を繰り返すことで、皆で気持ちよく語り、暗い夜道も明るい気持ちで帰ることができました。

1週間があっという間に経ち、私にとって初めての中央アジアの経験でしたが、人々の暖かい心に触れると同時に何とも愚かな人類の足跡に触れ、重い気持ちも交錯した旅でした。

このような機会を与えて頂いたNASHIMに感謝し、ご報告と致します。

## 韓国被爆者支援業務担当者への研修

NASHIMでは韓国に居住している被爆者への医療充実のため、医師等を受け入れ、研修を行っています。

10月初旬に今年度第1回目となる韓国からの医療従事者等の受入研修を実施しました。今回の研修へ参加したのは、韓国で被爆者支援に関する業務を行う事務職4名で、5日間に渡って長崎に滞在し、被爆者医療に携わる医療機関等の訪問や被爆建造物の視察などを行いました。

大韓赤十字社の金基淑さんや韓国保健福祉部の趙又美さんは「研修を通じて日本の被爆者の状況や支援実態を把握し、今後の在韓被爆者への支援対策の参考としたい」との目的を持って研修に参加されたので、1日目の長崎県福祉保健部山崎部長表敬訪問や、その後行われた被爆者行政説明では特に熱心に質問し、意見交換をしていました。



研修団はそのほかにも放射線影響研究所や長崎市原爆被爆者健康管理センターなどを訪れ、日本の被爆者に関する調査研究や健康管理の状況について学びました。また、原爆資料館や被爆建造物を見学したり、恵の丘長崎原爆ホーム訪問で入所されている被爆者の被爆当時の体験談をお聞きするなど、原爆の実相や日本の被爆者の気持ちに触れる機会を得、日頃各々が業務で接する韓国の被爆者の背景を理解するための良い経験となったようです。



長崎市原爆被爆者健康管理センター視察



恵の丘長崎原爆ホーム訪問

### 研修者紹介

- 大韓赤十字社特殊福祉事業所 庶務課長 キム キ スク 金基淑  
〈職務内容〉 日韓両国から受託した被爆者支援事業の全般
- 大韓赤十字社特殊福祉事業所 職員 ユインソ 柳印宣  
〈職務内容〉 在韓被爆者に対する保健医療助成費の支援
- 韓国保健福祉部 疾病政策課 主務官 チョウウミ 趙又美  
〈職務内容〉 原爆被爆者支援に関する業務
- 陝川原爆被害者福祉会館 生活指導員 イミンギョ 李珉慶  
〈職務内容〉 入所者の生活指導及び運営業務

10/1	来崎
	長崎県福祉保健部長表敬訪問 オリエンテーション
2	原爆被爆者行政説明(長崎県庁) 長崎原爆資料館、国立長崎原爆死没者追悼平和記念館見学 永井隆記念国際ヒバクシャ医療センター訪問
3	放射線影響研究所視察 長崎市原爆被爆者健康管理センター視察 日本赤十字社長崎原爆病院視察
4	恵の丘長崎原爆ホーム視察 被爆建造物等(平和記念公園、如己堂、浦上天主堂)見学
5	帰国

## 永井隆生誕100年記念式典で平和のリサイタル開催



平成20年2月3日(日)に永井隆生誕100年記念式典が長崎市平和会館において開催されます。この式典のメインはソプラノ歌手下垣真希さんによる記念コンサート、ひとり歌語り「わが心の歌・長崎の鐘」の公演です。

下垣さんはケルン国立音楽大学を卒業後、5年半にわたりドイツ国際ラジオ局でDJとして活躍されました。帰国後は「命と平和の尊さ」をテーマに、日本の歌を中心にしたトークコンサートを全国で公演し、2002年には長崎大学の原爆慰霊祭において『長崎の鐘』を献歌しています。また、叔父様が永井博士宅に下宿していたという博士ゆかりの人でもあります。

「わが心の歌・長崎の鐘」は、永井博士の平和への祈りと命の尊さを伝えるために下垣さんが書き下ろした歌と語りの感動作です。この作品は被爆し亡くなった下垣さんの叔父様や、原爆の犠牲者に捧げる鎮魂歌でもあります。

“人類愛に基づく恒久平和実現”の願いを今に伝えるコンサートにぜひご参加ください。

※この式典の詳細については下記にお問い合わせください。

永井隆生誕100年記念事業実行委員会事務局(永井隆記念館内 TEL/FAX 095-844-3496)

## 出前出張講座

### 「平成の鳴滝塾～ナガサキでしか受けられない放射線の授業～」を行います

小中学生を対象として、NASHIMが行っているヒバクシャ医療国際協力や放射線被ばく医療等について知っていただくため、長崎大学の先生などが出前出張講座を行います。「チェルノブイリにおける国際被ばく者医療協力」、「放射線、紫外線と健康について」など幅広いメニューの講義を準備しています。また、空気中のホコリやダシ昆布、岩盤浴の石粉末など身の回りの物質から放出される放射線を簡易型放射線測定器で検出するといった実験型の講義も計画しています。講座は今年度から実施しますが、平成20年4月以降はインターネットでも受講申し込みを始める予定です。

詳細はNASHIM事務局までお問い合わせください。

#### 講座メニュー

身近な放射線の話(自然放射線、放射線発見の歴史と応用)	
チェルノブイリにおける国際被ばく者医療協力	チェルノブイリ周辺諸国での国際被ばく者医療協力
	ベラルーシ人から見たチェルノブイリと長崎の国際被ばく者医療協力
	テレメディスンによる遠隔医療協力
カザフスタンにおける国際被ばく者医療協力	セミパラチンスクでの国際ヒバクシャ医療協力
	カザフスタン人から見たセミパラチンスクと長崎の国際被ばく者医療協力
世界の被ばく事故と国際被ばく者医療協力	世界の被ばく事故について
	もし、被ばく事故が起こったら
	放射線障害を治療する最新医療 –再生・移植医療について–
長崎原爆の話	永井隆、調来助、秋月辰一郎について
	長崎被爆者の苦悩 PTSDについて
NASHIMの国際被ばく者医療協力	NASHIMのこれまでの活動
	南米・韓国における在外被爆者医療について
世界保健機関WHOからみた長崎の国際被ばく者医療協力	
放射線・紫外線とわたしたちの健康	

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信  
第21号

発行/平成19年12月25日

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)  
〒850-8570 長崎市江戸町2-13(長崎県福祉保健部原爆被爆者対策課内)  
TEL 095(895)2473 FAX 095(895)2578  
<http://www.nashim.org/> E-mail info@nashim.org